

此
流傳

繪本輪廻物語

三日月
五〇五冊
老文書

13
972
17-1



江東 處士東麓著

安房小倉 忠流轉

輪廻物語 五冊

洛北 畠山保躬畫



本清

仲磨輪廻物語序

遠きむらゝを更めて眼より見

を知らるゝ書あましの高きなり

去るはゆれをむらゝに

請入るふしを世にたのむれ

あまのまてや此頃余は

おなく出まて大うつ童石

ほてもめやけりし年忠

門 遠 13
號 973
卷 1

仲磨
輪廻
物語
序

明
治
庚
辰
年
七
月
廿
七
日

毎冊一冊

をち秋と海のつらにききあはれおれ
當年た然くあま

御代ちやいもいふ華箋堂乃何
何の佐さる仲磨ういふ書なるを
めを来く予ふけいせいのあま
紐と手いふれといめくなく物を
より何れ輪四角小車の免なり
来きせとありても其むいふ遊ま

あきとらおとろくよきい思ふ
はく一家庭栄えせのやまれ
事あはと落もなく祀せそあ
きくもあうなむと思ひ
はくあきとら葉然そく

文政二^巳年睦月

安見雅俗翁

志る人

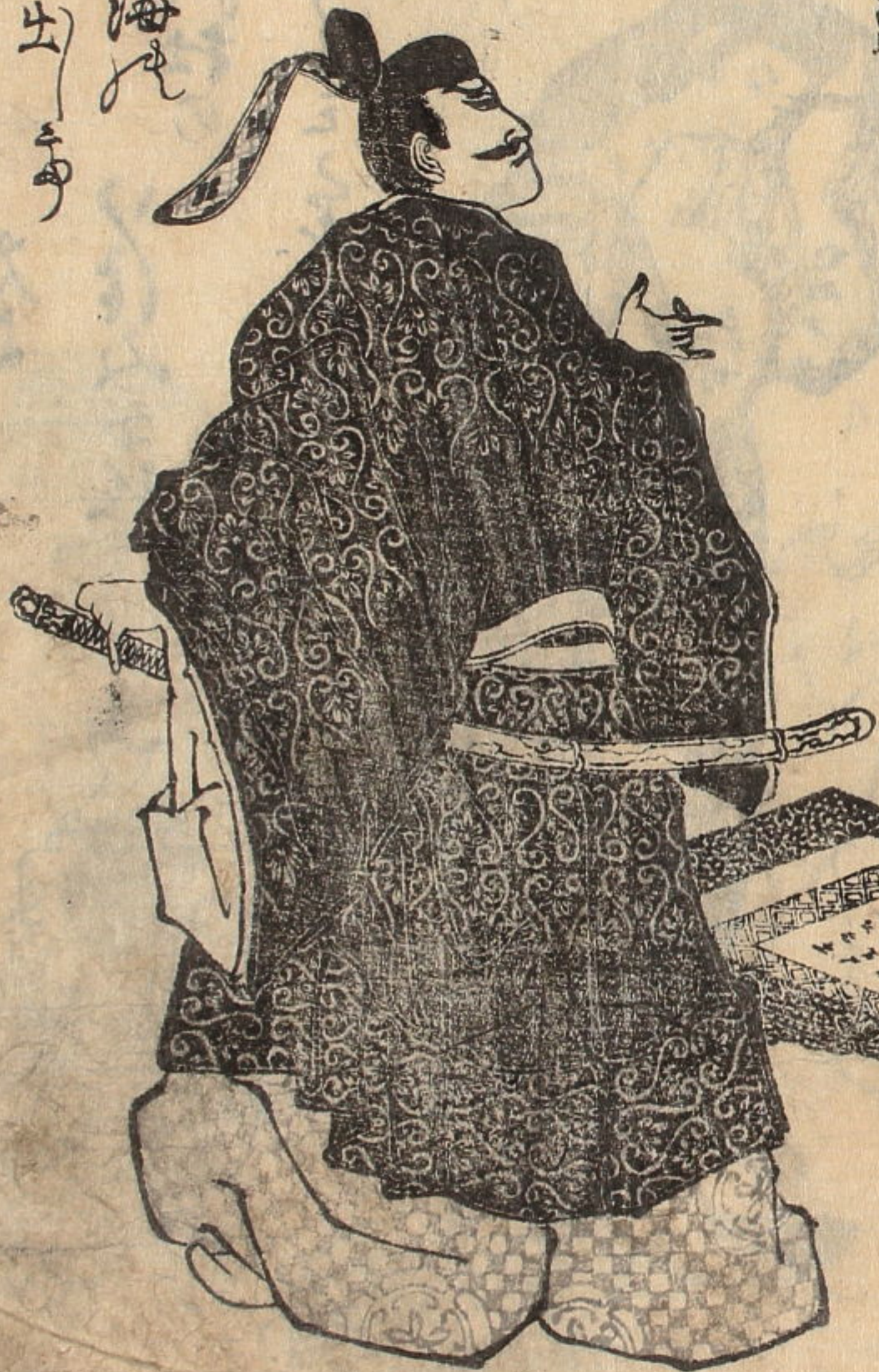


安倍仲磨 あべのちゆうまろ

天原振離見者春日
在三笠之八萬亦出
之月疑



吉備大臣 きびのおおじん



臣乃道

筑紫忠海也

松出也

之乃

御者

源宗隆



隆昌女



葛葉

あつたの林を
みよ
あつたの
うしろをみよ

安倍童子

輪廻物語總目次

卷之一

元正天皇御治世附 灵龜嘉瑞の夏

仲麿辞世附 好根不義の夏

卷之二

養老瀧乃由来附 好根奸惡の夏

吉備氏入唐附 安祿山奸計の夏

仲麿灵を顯附 吉備氏夢中に因基道を悟る夏

卷之三

華清宮因基附 吉備氏仁心の夏

野馬臺の詩附 安祿山再度吉備公を害せんを夏

隆昌女義死附 吉備大臣飯朝の夏

卷之四

安倍保名来歴附 保名信田杜小白狐を助る夏

保憲流刑附 信田の白狐前生を物語る夏

信田の鬼火 附 安倍童子龍宮小到る夏

卷之五

安倍童子京都小赴く 附 芦屋道満の夏

童子道満と術を試 附 晴明入唐の夏

橘元明奸計 附 安倍家再興蕃昌の夏

輪廻物語總目次畢

安部仲磨 生死流轉 輪廻物語卷之一

元正天皇御治世 天龜嘉瑞の事

本朝靈龜養老の頃遣唐使の役を蒙りて身は外国の土とあまざる名を
後世小頭とする。安部氏の由来と尋ねらる。人皇四十四代の帝。元正天皇と
奉らる。御室諱水高の皇女とて。和銅八乙卯年。御即位ありし。女帝
あて在せし。又時の執政の舍人親王萬機の政事執行と。元正天皇は石上
右大臣の藤原の不比等あり。四海波徳。夜戸を扇と。百姓鼓腹して
太平の御代を悦びぬ。是時を當りて。江州淺井郡あり。金牙緑毛の龜
甲の互う三尺許あるを奉り。訴へ出さる。我々共の江州清水の辺に住
。漁獵が業とははる者ども。よひ。今朝不思議の雲氣潮水の上小頭

其の何事やん（うんざり）と罷て越へ見よ正しく水原は物有と五彩の色
 我あり（うんざり）雲氣其辺より頭りきゆ（うんざり）不審存し取敢む鉤を下し見
 以処斯は怪異の龜を得くは（うんざり）棒げ奉るはくいと御白沙小鱗窟りて
 恭しくや上（うんざり）執政舎人親王茂始奉る（うんざり）左右の大臣各々感悦斜あら
 む就中舎人親王進み出て宣ふやうの臣不肖ありと雖旧祀を推て考
 へ見よ（うんざり）方今琵琶湖より天龜の出る事（うんざり）こよあは吉瑞とぞ存せ
 夫龜の甲長三百余種の長めて骨を外山の肉内小し手足首尾時
 小隨て六藏し（うんざり）金牙緑毛数千歳を歴て如此とぞ承り且往古漢土
 伏羲の代は梁河より天龜あらり（うんざり）八卦を負これ天地定位の先天
 の易はして則河圖と名づく（うんざり）後周の文王後天の易を考え其子周公且
 六十四卦をあらり給ひしとて天下の易歴其全きを得たり（うんざり）其他

龜に天瑞のありし事（うんざり）古今其例枚舉べし（うんざり）左ま天白皇女帝少く
 在せども天性聖徳成備をあらり（うんざり）斯る奇瑞の顯りしとて以
 りんと冠を傾りて万歳を祝し奉る（うんざり）左右の大臣及び列座乃
 ひ百官一統は賀瑞を述し（うんざり）帝亦敷感不斜の餘る年号
 天龜元年と改えあり（うんざり）彼湖水の渙客ども物賜りて重く賞し電
 を傾りて湖水は放ち散らさる（うんざり）其後帝重て勅定ありしとて
 くも先帝の謙りを受けて位より即の時（うんざり）當り斯る奇瑞の顯りしとて
 漢土の古よりありしとて（うんざり）方代不易の歴道成起し天下末世の空にせん
 かゆふ然るは我邦神代より易歴の道有とて（うんざり）四時の往來日月の
 運行其祥あり我亦え（うんざり）唐土より金烏玉兎集と号づけ（うんざり）易歴書
 の有とて聞ありしは是を借り得る（うんざり）其法を極め本朝歴道の足る

知を補ふをと思ふ速に遣唐使代以て借う受まきと認り有る事
 左右の大臣公卿の面々一統は伍頭して実小有難と慮方る事
 ら波濤万里隔く事唐帝珍藏の秘書代速く得く返らん
 事固よと容易に返りしれ各々黙然として言葉あり時よ舎人親
 王欽で下されらる臣兼く金鳥玉兎集の事承り及びその彼集
 六箇箇内傳金鳥玉兎集と名付し由其故ハ箇箇六方圓
 の器ありて大なる時ハ天の圓ある地の方ある小ゆて六今日人家日用乃
 諸具膳椀器皿々鍋ハ金竈に至りて皆方圓の形ありて陰陽の体
 或具せざるあり内傳とハ秘書口傳と云ふ如く金鳥玉兎ハ日月の異名小
 して畢竟天地の廣大無辺ある事家内日用微細の事迫りて
 と云ふハ標題小記せしハ誠小唐帝代々の珍藏ありて就中ハ玄宗皇

帝深く秘藏せし七重宝藏の中ハ納め天子より外三公九卿も拜
 する能はざり承ある事麗竜領下に有るとハ珠ハ得るとハ此秘書代
 へ得く無量に飯朝せんり當時其人有とも覺へざり其の事を里さ
 ざりて空しく返り来らんハ日本未代の耻辱ありて其人を獲ひ
 其器小當りて者以て遣唐使仰出させ然るべう存り奉ると理成
 竭してやまされ其時右大臣藤原不比等進出ありて爰小其人と
 其以春日ある三笠山の下小居住して節茂松濶の松小比し身成
 尾の亀小較らふ安部仲磨こそ智勇文武兼備して當世希有の
 人物ありてあまは此者ヲ遣はせしむんやりの仕損はざり共々
 聞あれ早くも輪命を以て召出させたる程に仲磨取物も取敢て家内
 あるに其人と為り柔和勇美ありて威有く猛りらむ上筋一悠して伺公あ

あつた。此人一度勅命が承りて渡唐せし唐帝の行りの秘書なり
ふらふ。不日や元得く飯朝せん。慶を回さるると思ふ人もあつたりとぞ。
柳此仲唐も八人皇八代孝元天皇の皇子。大彦尊の末孫也。一品倉
橋唐の後胤。從五位中將太輔安部船守朝臣の三男之兄。安部好根
とて生得倭奸ある故。父船守の勳氣が受た歳の頃より流浪困窮
の身とありて有欲無欲小暮せし。其名を知り人も無つたり。仲唐
ハ兄君と宵壤の相遠ゆ。博識雄才弁舌水を流さる如く。世の人称
賛せむと云者あり。さき今日論命は依て恭しく階下は躑躅し。遣
唐使勅命のどく命せらるれば公卿殿上人多う中ふ不肖の某
わら大切の尊命が蒙り奉る事。家の面目身の譽言れ何事うこれ
及ん君の神感が首を載さるゆも入唐仕らんふ。たとひ唐帝珍藏

の奇書ありとも。身命は代く元受飯く。百世不易の歴史を起し。敵
慮致安に奉らんる。掌杖指がごとく。とさる勇けし。勅答ありて已ふ
階下が下つたふ。舎人親王を掛奈何は仲唐頼母。死今の一
左こそあらんと思へども。三千里の外国といひ老少不定朝を計り。巨
。汝が心如何をやと宣へば。仲唐莞尔と打笑て。尊命の如く泡沫無常
の世の形態。りや某在唐の其間。天運拙く仇野の露と消行。事有
て。身ハ死し骨ハ朽るとも。二魂六魄天地に散せむ。一念中有はとちんく
。蓋蓋の一卷日本の宝とせむ。んば有る。御心中より思はれよ。と坊にて
。欄干はんとと打らる。時小取の金丁の眞実面は顯れて。勇々教も又
天晴あり。理あり。哉仲唐後漢土に於て。終は爲冥の客とあり。正
。前本意は縁事能りごとく。と。吉備氏入唐の時。當りて。幾回



あべのふゆまろ
 安倍仲磨
 遣唐使の
 宣旨を
 奉る
 図

南無阿弥陀仏



車延外言卷一

其の危難を救ひ。終に其書状日本へ渡す。遂に程歴て其後身安部
 清明と現る。本朝末代の歴道成立あり。一言の信。金鉄を貫く。眞
 雄も赫とく。前代未聞の人物あり。斯く安部仲磨ハ我館小立飯
 今Eものひも。遣唐使の大任を蒙り。由物格ま。妻女をり。め
 一子満月丸とせし。慶雲三年八月十五日の誕生。幼名は満月と
 され。今年僅小十一。い。志学に満され。元来才智あり。こて
 世に勝る。性質あれ。母君諸共并。其慶賀。速を。頼
 三十里の離別とある。喜悦の中。おも無量の思ひ。珠を欺く。一滴の涙
 小餘情あり。れ。余所小見。目もあ。爰に。仲磨の兄君
 好根とせし。父の勸氣。受。住所。流浪の身のうえ。
 常。産。有。し。仲磨。痛。思。父君の前を憚

知らぬ。見。消。去。歳。の。春。父。君。世。を。没。あ。ひ。仲磨心小
 思ふ。父在世の間。と。ま。め。あ。れ。没。去。あ。ひ。上。悪。人。あ。ら。う。か
 為。小。現。在。骨。肉。の。兄。あ。れ。艱。苦。疾。余。如。ま。ら。う。や。と。傾。く。我。家。へ。呼
 来。て。諷。諫。し。朝。夕。の。親。兄。の。礼。を。重。し。他。事。あ。く。は。え。あ。せ。し
 好根も流石。心は慚。牙。あ。ら。う。も。仲磨ハ。親。中。も。優。ま。る。恩。惠。ぞ。と。先
 非後悔の氣色。面。顯。り。別。人。の。如。く。に。あ。ま。い。仲磨深く心小
 喜び。未頼母。思。ひ。然。に。今。日。入。唐。の。重。丸。君。命。と。受。り。て。家。の
 面目。と。も。妻。子。残。跡。は。残。し。波。濤。万。里。の。旅。は。赴。死。生。死。存。亡
 預。め。期。一。巨。丸。の。秋。あ。ま。い。猛。く。勇。め。る。心。中。も。越。方。行。来。し。続。け。る
 言。も。無。り。一。二。三。稍。あ。り。て。兄。好。根。小。向。ひ。今。般。難。有。勅。命。は。依。り
 遠。く。異。国。に。赴。事。喜。悅。の。眉。を。開。く。は。物。思。り。死。今。の。風。情。未。練



暗弱の振舞と尊慮の程も愧うと心は掛る愛惜の覇をいふと
 せん一子満月僅と十一我とたれあとあと誰と能と教と戒とを加とたと願とりとの
 兄君我となるとのとてと教と導とびと死とあとると後と今と此と身とのと異と邦とのと士ととと成と
 も恨といとせととと忠と心と民と膽とのと英と雄ともと我と子とがとあとのと小と恩と愛とはと日と頃とのとあとりと死と兄
 好根の身の行状と知とあとると去と年と以と来とのと篤と実と折とはと觸とてとのと幸ととと妻
 子の事家の事と心と隈とあとくと託とをとたとれと好根と願とはと許と諾としてと抑と我と少と年
 の誤とはと父と船と守とのと怒とを受と遂と小と雲と水とのと身とととたとりと成と仲と磨と家とがと続ときとて
 よとりと我とがと在と処と探とりと出と呼と戻としとてとのと真と実と心と往と夏とのと咎とめとをと以と往とのとあ
 然と折とはと觸とをと物とをと寄と時と々と刻と々とのと諷と諫とはと四と十と二と年とのと非とをと知と遠と氏とがと昔
 のそとととあとるとでと忠と孝とのと道と信と義とのと理とをと弁とえとるともと賢と才とのと大と恩と此と恩と心と早と晚
 報と答とすると時と節とはと無とやととと朝と夕とはと思とひとぬとるともとあとるとしとをと真と甲と斐とあとるととと

今日と只と今と妻と子とがと我とはと託とせとると此と上ともとなとれと身とのと本と意と大と海とのと一と滴と九
 牛とのと一と毛と報とりとてとあとりと有とべと死とやと跡と小と心とがと残とまとるととと年と来とのと忠と誠と袖とでと身とを
 塵と芥とのと輕ととと比と山とよりと重と死と君と命とをと速とくと果としてと思とあとくと故と朝とのと日
 をと今と日とよりと屈と指とをとえと待とりととと涙とあとるとにと眞とはと仲と磨と夫と婦ともと満と月
 丸ともと共とはと涙と小と咽とびと叔と姪と夫と婦と父と子と兄と弟と骨と肉とのと親と同と胞とのと信とハとのと決
 小測とあとるととと斯ともと果としと有とされと願とくと旅と装とりとととりとつとらとぬ
 安部と仲と磨と入と唐と仲と磨と辞と世とのと皮
 頃とハと天と龜と二と年と八と月と廿と三と日と仲と磨と旅と装と己とはと整とひと家と皮と方と端とのと兄とはと託
 肥と前と国と松と浦とよりと出と帆と有と小と連と朝と日と和とのと好とすと思とひとよとうとのと船
 路と果と敢とらと同と年と霜と月とのと下と旬と唐と土と風と渡とのと津とはと着と岸とせとると維と時と唐と玄
 宗と皇と帝と開と元と四と年ととと聞とへとると斯とくと此と音と都とはと許とえとると隣と国とのと好とと

黙止ぐく。早速入洛ある。先旨。案内ふらる。頼て都より上らる。直是を名
 小負長安の都と思へく。元より大山を平均して都とせし。地面基局
 の如くは高く。都城の外は錦屏山より流る。処の川を以て外堀の如く。四
 方より廻らせし。北の方より東南に横に折る。流る。都の入口に三ヶ所。皆大
 門ありて南大門。東大門。西大門と号け。其大門の通るを大道と名付。道
 幅五丈。こゝ日本五十八間計。三市六街。縦横を分きて。民戸數十萬
 此れ甍を並べ軒を連ね。其豊饒ある。度限りなく。路は墜るるを拾ひて
 夜戸を鎖さざり。都の外廓は石壁高く峙ち。石を疊て堀とあり。東西南
 三大門の前は。橋を通りて外堀を渡り。橋の方代不朽の爲。磐石を以
 て礎とし。橋の互う六十余丈。幅は大道と均しく。左右の楹は皆石を以
 て造る。両方の橋基は。獅豹虎象の形を敷きて立並べ。楹門の額高

く日不映して輝光。楹の四方欄干朱を以て塗る。身月宮といふも
 くの思ふ。わらうの形勢。斯て程多く朝門を入。建る向を見やり。さるる
 大殿は南向りて。仁政殿といふ額を掛。中央正面は。胡床小虎皮を
 ころぞ。玄宗皇帝の玉座と覺し。左辺右辺は。文武官人巍然と
 並び立。其名も高。張九齡。哥舒觀。安祿山。揚國忠。等と始り。さ
 善悪二ツの忠臣。侍人。席に進み。見せし。仲膺頓て階を上。禮を
 平伏せし。間もあらず。玄宗皇帝出座ありて。日本勅命の趣意
 を問ひし。仲膺曰く。元正帝の勅命。金鳥王。兎集。懇望の由。爰も
 あく。速く。召し。帝遣り。聞し。召し。我國第一の秘書。輒て。他國へ渡
 るべし。あは。唇齒の好ある日本。よろの。元とあれ。評定の上。連て
 沙汰。及べ。死の間。其間。ハ。汝暫く。滞留。あれ。と。鴻盧館。と。号づけ。する。

他國の人を饗應の爲に設け館へ送る。山海の珍味を以て最可嗜成
 奔支之柳。玄宗皇帝とす。唐の太祖皇帝より六代の帝にして姓の本名
 ハ隆基とす。是れ賢徳の名君也。仁を好む者。書を嗜む。褚良儉約を本
 として姚崇宋璟を以て之を儒臣と名て大臣とす。大聖孔子を文宣王と崇
 め奉り。毎歳春と秋と兩度づ大なる祭禮を行は。政道正しく在せし
 更下民其徳小懐く事。孩兒の父母を慕はく。上下和順四海安穩。成
 小愛小弘農の人は揚玄珍といふ者の娘。揚大真とす。許す。絶世の
 美人也。綻く。桃花の露を合はく。雨後の秋月雲間より出ると似
 たり。玄宗一度敵覽す。深く其色を愛し。以て貴妃の官
 を賜ふ。揚貴妃と召され。昼夜御側を放し。あつらひ。傾城傾国乃
 豈言。宣哉天下大小の政。是より瘳きて。酒宴舞樂の長き。揚

貴妃の兄揚国忠を丞相とす。万機の政を司ら。め。揚国忠
 其性暴悪無道。政を小僻事多し。六万民是を悪め。そ
 の威は恐ま。爰に河北漢陽の太守安祿山といふ者。身材八
 尺。眉目清。才智勇兼備。實は當世の人傑。つら。帝の行状を見
 に。閨門不正。乱の基。唐の代既長。と思ふ。深く思慮して
 都へ出ま。帝の侍臣や。更之。官中の女官。金銀結帛。賄賂
 て。竊に揚貴妃と阿。其推挙に。帝の敵慮。適ひ。却て人
 揚貴妃と密通。遂に天位を奪はんと。結構を。帝は
 一。憚。事。天下の政。随意。今日仲磨退出の後。安祿
 山。揚国忠を召。仰出。今般日本より。金烏王

兎の一巻。我邦第一の秘書ありと以て他国へ渡りて居る。斯の如く
 思ひしと彼が人物の飄々然として百官列坐の中にも好まざる心は
 程の更失も遺さざりて述し面魂尋常の者とも見へざる。ゆへに断
 りていりしよ。世小益ある秘書を秘して卑と其小樂を同ふせざるは君子の
 為さる処おど。耻くされんも口惜しく又斯をうに秘藏せしと幾あな
 びと渡さんや。彼が術中不隊うは似く。後日悔も及ず。渡して能や別
 れ又渡さざりて能き理あり。朕が望ありとより是之如何くと宣へ安禄
 山進と出て夫我邦天下の中區。諸異邦外国より。獨我邦を崇事
 斯の無二の重宝の有故あると空しく日域の物と成あ。長く国威の傾く
 端あり。宣たとも存じや。事と然も今理不尺に断り故を時ハ
 宝を悟むと笑らるのま。礼を知らざるの誹謗を得ん。兎角にま。彼と留

置る。徐よ其才機を試と。英才の者は非ざる。彼も勝る者をもりて
 臨機應変は断げせん。何の憚らざるかと決然とてや。されん。帝
 竜顔うりり。疾々との詔に。諸卿其座を退きて。當時の名を得し
 詩客文人。鴻盧館小尋ね行。或の詩を賦し。文を作り。又の古今の事
 蹟を論じて。應其器を擲り。雄弁卓量一人として及ぶ。のあ。く
 此由散聞小達。これバ帝深く其才奇なり。其後日本へ飯さん。多
 を惜や。金烏玉免集の遺て賜さる。其間心長く。我國に滞留あれ
 と。明則と云ふ。居館の地を賜り。名も朝衛と改む。昔勅命ありて
 金銀結帛の敷を盡し。美女數十人賜り。往昔の曲。舞。園
 雲長と欽慕の餘り。三日は小宴。五日は大宴。馬の上下の毎度。金銀
 多賜り。上賓の礼は。饗應せし。も斯やと思ふ。村へ。然れども仲磨の忠

大日本
二五五

論國物拾遺



軒延物語卷一

安倍の仲磨
あべの かつまる
仲磨
凌雲閣
あやむら
小
餓死
が
よる
図づ

義廉直の性質や露村の心成変せど只朝夕は日本の空ありく
 思ふも彼一巻を乞得ぬらちの死とも再び飯らどと心は誓ひし事あれ
 ば是非ふ愛ぬく見んものをと帝の気色よれすは日々王座は侍坐しつ
 勅許の日ぞ待にる斯く其年も暮るる元五年改王の春立歸り
 間もあく夏過秋も七月の廿日頃ぞ成るる此時安祿山揚国忠の弒滅
 勢さるめして隠謀密策日々の評定大半成就せしにつけても此程切ふ心
 掛りある安部仲磨去年渡唐の初まに玄宗帝の敵慮は叶ひ且暮
 王座の左右へ召出されの御寵遇彼若く若や我々が友逆の機を推察
 して竊に敵聞は健しあが大夏忽露頭して千悔跡を嚙る返りし度
 頭れざる其内より先渠を亡くし禍の根を刈り去らんと安祿山揚国忠
 曹勳司馬聶翁を始とて兼て一味の佞人原計畧密は示し合せ一日

勅命と偽て仲磨を招請し凌雲閣と号づけり高さ三十丈の樓上
 る旨酒嘉肴杯盤狼藉撞々の饗應心を竭して他支あれ体し見へ
 ころしく六可憐安部仲磨深は奸計の有ん人神ありぬ身の露知
 めりど膝打らるるげ余念を忘れ時を移して樂なる城也天運命は
 草る時博識の智者も其身を知ること年来秀し英才も今ハいつ
 り順逆の礼も乱し盃の彼へ巡らし此へ廻り献つ酬へ傾けし教も積
 りそ醜酩の折しも吹来る濱風は醉醒しさる快き思ふを倒さし一睡
 せり頃ハ七月下旬さあれは冷氣を催すと時節あるに早黄昏も成
 くれは尚も怨しれ海風も不圖目を覚し起上る太陽も西山は波
 してさうりて廣き高接のの闇なれと燈火無き此ハ奈何かと坐切と
 を見らに饗應の官人皆退ひて坐上暗し寂莫と仲磨心は怪あら

声を限り呼ばせど。答へる人も荒波の岸に寄る声あはして。誰音信乃
 有されば。棲を下人と四方を見らば。何の向や引らうらん。措楫とて
 有さる。仲磨初と心付。扱は今日の酒宴。実の奸計の陥穴。安祿山
 揚国忠が深くも。工の奸計ある。仲磨浅陋。少くも悟り得む。看渠
 等が毒手。小死せむ。命の惜むも。足されども。元正帝の勅定。以て遣り渡唐
 去年より。心つくせし。如ひもなき。君への不忠身の耻辱。今ぞ初て思
 ひ。今人親王先見の一言。我亦其時誓ひ。如く身ハ幽冥の客とて。
 骨ハ外国の土と朽と。凝塊。一念ハ長く此世に留まら。金鳥玉兔の
 一巻を。早晚奪得て。日本へ渡して。やうをくべ。と眼逆つ。辰青く。憤
 怒の思ひ。堪ざる。是より日数三七日。水穀をも断まら。いづく命
 の続くべ。今日ぞ命終と思ひ。八月十五日と聞へ。古今獨歩の

英雄も。流石故郷の慕。二其の麓。春日野。残し置ける妻や子ハ。
 斯る事と。不知して。去年の冬より。此秋や。嶮岫の思ひ。待ららん。
 兄も。嗚う。此年月。心若く。思ひ。我の。あれ。生国の。秋津州を。遣
 り。離れ。君命と。いひ。死を。異国の。土に。晒さ。過去の。修因。今生乃
 現果。拙ら。此身や。と。愛着心の。思ひの。蘭波。目を。開。二十
 里の。海上。眼下。あつて。海士が。釣。舟も。あ。蒼々。渺々。天の。原。仰
 て。遙。秋。東の方。より。玲瓏。と。輝。外。は。三五の。月。盈。虧。開。落。有。為
 轉變。嗚乎。我。迷。死。生。命。ある。人の。身の。何を。悔。何。を。を
 恨らん。我。苟。く。も。豊。原。生。と。受。掛。や。も。黍。あ。神の。御。未。は。は
 身の。我。本。邦。の。習。り。有。和。哥。數。寫。の。道。を。忘。ま。仲。磨。程。の。忠。臣。も。最
 期。方。寸。絲。乱。辞。世。の。歌。も。無。り。と。世。の。人口。は。掛。らん。事。死。後。の。念

此上あり。と六思入とも差當り。文房四宝の有されば。何れ記して遺さるべし。
 心雲胸霧浪の雨。知らぬが海ある明月の影。冷たくさう入の昔故国なり三
 笠山。渾家長少通霄がら。詠一月の歌めて。今日見る月も変りぬれど。
 更う果る身の上と思ひまうつ。狩衣の左の袖を引ちたう。右ある指を
 喰切て滴る血汁血筋の恩縁又縁ありて。又も古卿の人来らば。此歌見よし
 傳へませよと。二首の辞世かくせらう。

天の原。うらさけまき。春日あは。二笠山守り。ぞぞ守りぬるも。
 と認が末期の一句。和歌ふ心をわく露の清く果あり成る。是唐の開元
 五年八月十五日。行年三十四才。ゆき。可惜年齒之斯。安禄山揚国忠の
 計畧成就せりと心は悦び。頓て帝へ病死の体ふりてあて。一方の事已
 隨意に振舞ふ。此時帝も揚貴妃の国色は。満ちひひ折らるれば。

強く事の虚実を尋さる。其終渠等が計らひは。任せ給
 ふ。唐の代遂に滅せしむる。盪鷗とこそ思ひまて。心ある忠義の人。眉
 顰むるも。数多あれど。大夏の前きんと。まゝ時。一本枝りて。さへん。独り
 益ある死のそあり。安奸邪智の舌頭。中心も不忠と。取成され。無実の
 罪。身を果して。家をこふ。夏あり。時勢を。しる。浅智の至ら
 と。叔止し。こそ。せひ。あられ。ける。

安部仲磨 生死流轉 輪廻物語卷之一 終

